




狐坂ワカモ保護観察記録

文 夜の機動戦士
絵 びんせん

ADULTSONY

R18

成人向け



帯が解けない... .. ?

ふふっ、
試行錯誤なさいませ♡

狐坂ワカモ保護観察記録

(夜の機動戦士)

(夜の書齋)

恋は目でなく心で見えるもの。
ゆえに、恋は人を盲目にする。

《青天の霹靂》

五月が半ばに差し掛かろうかというある日のことだった。

サンクトウムタワーの連邦生徒会に、私は呼び出された。そこで受け取った封筒の中身をエレベーターの中でもう一度読み直す。

使命感と不安感の板挟みで、思わず溜息がこぼれた。

* * * * *

「狐坂こさかワカモを、シャーレなながみの先生の管理下で保護観察処分とします」

連邦生徒会長代行の七神リンおがたにきつぱりそう言われた時は、我が耳を疑った。しかし、尾刃カンナおがた公安局長の説明が続き、我が耳の正常を思い知った。

「ワカモと公安のイタチごっこなのです」

ヴァルキュレ全体の練度が最近大きく向上し、SRTに頼らずともワカモを捕縛できるようになったそうだ。それは喜ばしいが、矯正局へ移送する前に、あるい

は移送直後に、あの手この手で逃げられてしまいうらしい。

捕縛作戦には時間と人手を多く取られる。周辺地域への被害も避けられない。公安局の中でも悩みのタネだ、と語るカンナの表情は重かった。

「D・Uの監視カメラから逃走経路を割り出して分析した結果、彼女は先生のいる場所へ向かう傾向にあります」

心当たりはいくつもあった。

シャールレ入口のセキュリティゲートが破壊され、アラートと共にワカモが執務室を訪れる。

街中を歩いていると突如不審な銃撃や爆発が起こり、まさかと思つて人の気配がない所まで走つていくと、そこでワカモに声をかけられる。

脱獄して以来指名手配のワカモは大抵誰かに追い回されていて、十分な話もできない内にそそくさと姿を消してしまう。そんな繰り返しがあるのも事実だった。

「思い切つた判断ではありませんが、連邦生徒会でも見解は一致しています」

「標的とする先生の所へ彼女を置いておけば、街への被害も、怪我人も減ります」
「……なるほどね」

確かに合理的だ。彼女が大人しくしているならば、だけど。

「ワカモが、処分をすんなり受け入れるかな？」

「連邦生徒会の許可を得て、矯正局から条件を提示してもらいました。三ヶ月間、保護観察下で暴力事件を起こさず、奉仕活動の実績を残す。そうすれば、百鬼夜行連合学院への復学を認める、と。先生の名前を出した途端、ワカモは大人しくなりましたよ」

カンナが皮肉つぽく笑いながら、ブラックコーヒーを口に含んだ。

「ねえ、リン。確かワカモは、停学期間中に留年してたよね？」

「ええ。学園自治区により詳細は異なりますが、原則、このまま停学期間が長引けばいずれ退学処分となり、学籍を失うことになるでしょう。寮を追い出されて住所も無くなります」

「——そうか……」

災厄の狐という二つ名で恐れられるワカモも、大切な生徒の一人だ。一旦レールを踏み外せば、彼女は社会参加の道を閉ざされてしまう——。

私は拳を握り固めた。

「分かった。引き受けるよ」

「……厳密に言うとは、これは依頼ではなく決定事項です。先生に選択の余地はないのですが、合意が取れて安心しました」

リンの口調は冷ややかだった。見方を変えれば、ワカモへの対応を私に丸投げしているも同然だ。だが、シャーレ顧問の私に負けず劣らず忙しい会長代行だ。そういう対応になるのも無理からぬことだろう。

「では先生、早速ワカモの身柄を引き受けに向かってください。先生は保護観察官と保護司を兼ねています。指定する住居に彼女を住まわせ、生活を管理していただくよう、よろしくお願いします」

そこまで話すと、リンもカンナも、応接スペースのソファアートを立った。

* * * * *

警察署を訪れると、私はすぐ地下まで案内された。ワカモを拘束中の部屋まで来ると、分厚いガラスの向こうに彼女はいた。両手を手錠で拘束されている。

「ワカモ、迎えに来たよ」

「ああ、あなた様……！」

私の顔を見ると、ワカモの顔がぱあつと明るくなった。腰に生やした狐の黒い尻尾を、ふわりふわりと揺らしている。両手の拘束を外されても、ワカモは逃げ出さうとしない。それどころか、私と面会して照れくさそうにはにかんでいる。周囲からの刺すような視線も意に介さない彼女を手招きして、私はそそくさと警察署を後にした。

D・U・シラトリ地区を歩きながら、私はワカモに事の次第を説明した。

狐坂ワカモは札付きのワルだ。ヴァルクューレの資料によると、彼女はならず者を扇動しての暴動、略奪、破壊行為を何度も働いていた。停学処分となり、矯正局へ収監されるのに、異論を唱える者はいないだろう。

バレンタインデーに面と向かって話して以来、少しは悪行も鳴りを潜めたようだ。しかし、目的を定めればいかなる手段も辞さない所は変わっていない。

「保護観察……うふふ、先生に観察してただけるなんて……」

退学処分の可能性を、ワカモは深刻に考えていないようだ。それどころか——予想された反応ではあつたけれど——私と一緒に時間ができたと浮かれている。

私の懸念を余所にルンルンのワカモへ説明を続けながら、彼女に割り当てられた住所に向かった。どうも見慣れた風景が続いている。最寄りのコンビニを通り過ぎ、私の住むマンションの前に辿り着いた時、住所のメモをもう一度見せてもらった。

「これ、もしかして……」

自分の住所ぐらい暗記していると思つたが、人の記憶力というのはアテにならないものだ。まさかと思ひながら、指定の部屋に向かうが——明らかに、体が通路の歩き方を覚えている。

「ここ、やっぱり私の部屋だ……」

「あなた様のお部屋！ もしや、このワカモ、先生と同じ屋根の下で——」

「い、いや、さすがにそれはないと思うよ？ ちょっと問い合わせてみるね」

モモトークをリンに送ってみると、すぐに既読がついたが、

『入力時の手違いかもしれませんが、その建物および周辺には他に空き部屋がありません。先生のご判断で、よしなにお願いします』

とこれまた投げっぱなしな返事が来て、それで終わってしまった。

「……うーん……」

「ああ、これから三ヶ月、私わたくし達はここで甘く濃厚な時間を過ごし、じっくりと愛を育み合うのですね。何と素敵なことでしょう……!」

ワカモはあらぬことを考えて悦に浸っている。

「……とりあえず、いったん中に入ろうか」

私が住むのは四階の角部屋。人通りの少ない住宅街のマンションではあるが、こんな所で騒ぎになってもいけないし、保護観察の役目がある以上、ワカモを遠くへやることもできない。視点を変えれば、最も効率的と言えるけれど……。

家の中が散らかっていないのは幸いだった。散らかすほど家にいない、と言った方が正確だろう。シャーレの執務室で夜を徹するのも、珍しくないのだから。

「お邪魔いたします♪」

玄関を後ろ手に閉じながら、ワカモは琥珀色の瞳をぱちくりさせた。ヒトの耳とは別に生やした、頭頂部の狐耳がぴこぴこ揺れ、期待に浮足立つ彼女の心を代弁し

ていた。

「あなた様は、ここで寝起きされるのですね」

「うん、まあ、そうなるね」

赴任した当初から住む家に人を招くのは初めてだ。連邦生徒会に家賃を折半してもらっている賃貸の2DKは、一人暮らしでは持て余している。

ワカモをここに住まわせると仮定すると、物置と化した部屋を整理すれば、彼女の自室は確保できる。

そうになると、次々と疑問が浮かぶ。

鍵は一つしかない。彼女の寢床はどうする。踏み込むべきでないプライバシーの境界にも線引きが要る。

ワカモからは「一目惚れなんです」と言われた。一過性のものだろうが、好意を抱かれているのは、さすがに知っている。だが、これは恋人同士の同棲ではない。顔見知り同士のルームシェアなのだ。

「……ひとまず、やるべきことを整理しようか」

「はい、あなた様」

ダイニングテーブルにワカモを呼び、まずは、やることリストの作成だ。

「ワカモ。荷物はその……風呂敷包だけ？」

「ええ。着替えや弾薬が少々入っておりませんが、私物の大部分は百鬼夜行の寮に。そこも、私の部屋は停学になって以来、長らく封鎖されておりまして。逃亡生活中根城にしていた所にも、少々荷物がございます」

「生活費とかはどうしてたの？」

「……ちよつとした交渉で、譲っていたくなど……」

ワカモが気まずそうに口にした。

——恐喝か、略奪だね……。

「人に迷惑をかけるやり方はダメ。以前も、言ったよね？」

「あ……っ……！！」

私が諭すと、ワカモはビシッと背筋を正し、眉尻をぎゅつと下げた。涙が目に浮かび、今にも泣きだしてしまいそうだ——と思ったら、大きな目から雫が垂れた。

「もっ、も……申し訳ありませんっ！ あ、ああ、あなた様、どうかワカモを嫌いにならないで下さいっ……」

「ワカモも大切な生徒の一人だ。嫌ったりはしないよ。でも、このままだと君は退学になってしまう。私はワカモにちゃんと、生徒として復学してほしいんだ」

「は……はい……」

ぼろぼろと涙を溢しながらワカモはそう答えたが、私に責められたと感じているのか、狐耳も尻尾も力なく垂れ下がっている。

災厄の狐は誰もが忌避する危険人物だ。だが、白狐のお面の下には、こんなにも脆くて、不安定で、情緒の幼い少女がいる。そういう生徒ほど、私は放っておくことができなかった。

「ワカモは過ちを犯したけど、前を向ければ、まだやり直せるよ。今回の保護観察はいいチャンスになる。だから、一緒に頑張ろうね？」

ハンカチで目元を拭いながら、ワカモが頷いた。百鬼夜行自治区特有の、目元に紅を引いた「目弾き^{めはじ}」の化粧が、目蓋を閉じるとよく目立つ。長い睫毛にはまだきらきらと雫がついていたが、彼女はそれから素直に話を聞いてくれた。

まずもって用意するべきは、ワカモの生活用品だ。物置部屋を片付けてワカモの部屋にすると伝えると、

「このワカモ、夜はあなた様と同じ寢床で……」

なんて言いかけたから、布団セットがリストの先頭に書かれた。ワカモ自身の着替えも、もう少し余裕が欲しい。大人のカードのポイントが貯まっているから、それでお金は工面しよう。

「よし、買い物に出かけようか、ワカモ」

立ち上がって財布の中身を確かめる私に、ワカモは静かについてきた。

かくして、キヴォトス随一の危険人物との二人暮らしが、幕を開けるのだった。

《眼差しは色眼鏡越し》

「じゃあワカモ、今日も一日、頑張ろうね」

「はい、あなた様」

保護観察期間が始まってから二週間あまりが経とうとしていた。梅雨の到来を実感する六月上旬の蒸し暑い朝、ワカモは私に同伴してシャーレに到着した。彼女はオフィスのエレベーター前で予定の確認をして、そのまま自習室へ向かった。

学業にあまり真面目でなかったワカモは、このままだと卒業までの単位が足りなくなってしまう。そこで、私は連邦捜査部の権限を利用して百鬼夜行の教材をもらい、彼女に補習を課していた。早めに設定した課題のペースになかなか苦労しているようだ。だが、そうでもしないと、困るのは復学後のワカモだ。

今日も今日とて書類の山と格闘していると、トリニティ総合学園の羽川ハスミが、小走りで執務室に駆け込んできた。

「先生、ご報告があります。その、バルコニーの花壇に……」

「ああ、ワカモかな？ 大丈夫だよ。訳あってシャーレで身柄を預かっているんだ。

肩にバッジをつけているでしょ？ 花壇の手入れを頼んだだけだから、安心して」

「そ、そうなのですか。先生がそうおっしゃるなら……」

ハスミの暗赤色の瞳は、まだ当惑に揺れていた。

シャーレの当番へやってくる生徒で、ワカモの噂は知っていても、彼女を實際目にした者はそう多くない。しかしながら、ハスミのように、ワカモの巻き起こした事件に関わったことのある者は、慌てて私へ報告にやってくる。

「そつとしておいてあげれば、それでいいよ。でも、もし何か不審なことをしていたら、すぐ私に知らせてね」

「ええ、かしこまりました」

銃弾の全てを私が預かって、ワカモは武装解除されている。丸腰でないことが分かるように愛用のライフルを担いでいるから、いきなり襲われるようなことはないようだ。

それでも、お尋ね者である「災厄の狐」の姿は、それだけで警戒心を呼び起こす。今までの行いが悪しき尾を引いているのは確かだった。

ワカモとの共同生活が始まって、明確に変わったことがある。食習慣だ。多くの生徒から私はその杜撰さを度々指摘されていたが、最近は血色が良くなったと言われることが多くなった。

今日持たせてもらったお弁当も、ふんわりした厚焼き玉子や、甘じよっぱい粗挽きの肉団子が嬉しい一方、アスパラ炒めの緑やミニトマトの赤で彩り豊かで、見た目にも美味しい。しかしながら、桜でんぶで鮮やかなハートが白飯の上に描かれていたりするので、人前では開くには勇気が要る。一人になった時を見計らってデスクで頂くのがほとんどだ。

私の懐事情を早々に教えておいたおかげなのか、ワカモは料理本に付箋を貼って勉強し、スーパードのおつとめ品や冷蔵庫の残りものを上手にやりくりしてくれる。

「あなた様のため」と献身的な努力をしてくれるのは、何とも有難かった。

「……今日は、こんな所かな」

午後六時。緊急性の高い業務はひとまず決着した。やらなければならぬ仕事はまだまだあるけれど、今日はミレニアム自治区へ訪問しただけでお出かけが済んだ

から、まだマシな方だ。以前だったらこのまま残業だったが、今はそういうわけにはいかない。ワカモを連れて家に帰らなければならぬのだ。私も私で、業務の進め方を工夫する必要に迫られていた。

見られても問題ない書類を選んで鞆に詰め、ワカモを迎えるべく、靴を履き替える。バッジのシグナルをスマホで探ると、どうやら彼女は休憩室にいるらしい。

「ふふ……うふふ……どうです、あなたの命はあとわずか。じわじわと、着実に追い詰めて、その命の儂さを教えて差し上げます……」

休憩室の椅子に腰かけ、ワカモは梱包シートをぶちぶちと潰していた。私が声をかけると我に返り、さっとそれを鞆にしまった。狐耳を寝かせて、照れ笑いを浮かべている。破壊衝動の代替行為としてプチプチ潰しを思いついたようだが、ストレス解消の現場を私に見られるのはどうも恥ずかしいらしい。

「やあワカモ、お疲れ様」

「ええ、お疲れ様です。……先生、本日の課題はこちらに」

「うん、チェックするね」

課題達成シートと照合し、承認のスタンプを取り出した。進捗管理の証に押すス

タンブを彼女は気に入っていて、きっちり課題を仕上げ出してくる。

保護観察が始まった頃よりも、ノートが見やすくなった。ノートの中身は、頭の中身。学んだことを整理してアウトプットできているのが見て取れた。

「うん、よく頑張ったね。今日はネコさんにしようか」

「……………！ ありがとうございますっ……………！」

シートの空白が最高ランクのスタンブで埋まっていくのを見て、ワカモは目を輝かせる。十八歳という年齢の割に無邪気なりアクシオンだった。それだけ、まともな学校生活を送っていなかったのかもしれない。こちらの承認に顔を赤らめて喜んでいるのを見ると、こちらとしても、たっぷり褒めてあげたくなる。

「じゃあワカモ。帰ろうか」

「はい、あなた様。……………その、今晩は、召し上がりたいものはございますか？」

「うーん……………あ、今日は、煮魚の口かな……………」

「では、そのようにいたしましょう。金曜日はお魚の安売りをしていますから、今からならば、なおさら好都合です」

休憩室を後にしながら、ワカモはスマホのメモ帳を確認していた。

ルームシェアの相手が出来たことで、私はある意味、家の中でも気が抜けなくなっていた。いくらプライベートな空間とは言っても、品の無い所は見せられない。

一定の緊張感が出るのは悪いことではないが、ワカモとの生活を送る上で、対処に困ることもあった。

「あなた様、お風呂をどうぞ」

湯上りのワカモが、バスタオル一枚で浴室から出てきた。数歩分の距離が開いているのに、濃厚な石鹸の匂いが私の所まで漂ってくる。

「ワカモ……ちゃんと服を着ないとダメだよ」

私は努めて冷静に話した。

収縮色の黒い制服姿では目立たないが、衣服の下に隠されたワカモの肉体は、はちきれそうな程に瑞々しくて豊満だ。バスタオルの縁から零れんばかりのバスタはふっくら柔らかさそうで、かと思えば肉付きの良さに対してきゅっとウエストはくびれている。

標高の高い双子山に負けず劣らず、お尻もポリウムがある。むっちり肉厚な太腿に、曲線美の見事なすらりと伸びた美脚といい、気を張っていないと視線を奪わ

れそうになる。タチの悪いことに、ワカモは己のスタイルの良さを武器として自覚しており、すぐ私に誘惑を仕掛けてくるのだ。

「ふふっ、先生の前ならば、このワカモ、生肌を晒しても……」

「そういうのはよくないよ。節度を守らないのは、だらしないから」

ワカモを諭すのに私はいつも慎重だ。言葉に勢いを持たせてしまえば、思い込みの激しい彼女はたちまちに取り乱してしまう。

さて、今回はどうだろうか。

「……はい、かしこまりました」

従順な返事に、私はほっと胸を撫でおろした。ところが、彼女は脱衣場へ引き返さず、ひたひたとこちらに足音を近づけてくる。

「——お背中を流しましょうか……?」

ねっとり湿った囁きに、思わず尻が跳ねてしまった。

「もう、ワカモっ。体を洗うのは一人でするからっ」

何かにつけてワカモのアプローチは積極的だ。のらりくらりとかわし続けるのも神経を使わされるが、かといって無下にもできない。

「うふふ……失礼いたしました」

含み笑いをしながら、今度こそワカモは脱衣場へ戻り、えんじ臙脂色のさむえ作務衣を纏って出てきた。いつもの部屋着の浴衣ではないが、すっきりしたシルエットも似合う。

浴室に向かう時にちらりと見ると、ワカモはインナーカラーの赤が入った髪を櫛で丁寧に梳かしていた。カラスの濡れ羽色の、腰まで伸びた黒髪は、ドライヤーで乾かすにも時間がかかって大変そうだ。私が風呂から上がる頃には、ツヤツヤした毛並みの尻尾のブラッシングをまだしているかもしれない。

「……次に同じことをされないようにしないと」

鼻腔に残る風呂上がりの匂いを、大人の理性で振り払った。

二人暮らしが始まって以来、私のQOLが向上したのは確かだ。掃除されたリビングを目にすると、自分の寝室を散らかしっぱなしにはしてられない。家事を任せきりにするわけにもいかないから、せめてと思って、洗い物やトイレ掃除は常に私が先手を取る。

家に帰っても仕方がないからこのままシャールレに泊まろう。そう考えていた自分が嘘に思えるぐらい、自宅が心地よくなっていた。それは紛れもなくワカモのおかげであったのだけど――彼女の厚意に甘えている気がして、私は後ろめたさを抱えていた。

「……冷たっ！」

温水を待つのを忘れた私に、シャワーヘッドが冷や水を浴びせてきた。



夜の書齋



「あなた様のお部屋!? もしや、このワカモ、先生と同じ屋根の下で——」

シャーレの先生に、狐坂ワカモの保護観察官となるよう要請が下った。三ヶ月間の保護観察期間を無事に終えれば、ワカモの復学を認めるという。

生徒のためと引き受ける先生であったが、与えられる仮住まいが手違いで先生の部屋になってしまった。

ほとんど着の身着のまま来てしまったキウオトス指折りの危険人物との共同生活、突如幕を開ける。



夜の書齋

